

**[A年] 待降節第3主日(2020年12月13日)****【旧約聖書日課】士師記13章2～14節**

<sup>2</sup>その名をマノアという一人の男がいた。彼はダンの氏族に属し、ツオルアの出身であった。彼の妻は不妊の女で、子を産んだことがなかった。<sup>3</sup>主の御使いが彼女に現れて言った。「あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。<sup>4</sup>今後、ぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないように気をつけよ。<sup>5</sup>あなたは身ごもって男の子を産む。その子は胎内にいるときから、ナヅル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。彼は、ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救いの先駆者となる。」<sup>6</sup>女は夫のもとに来て言った。「神の人がわたしのところにおいでになりました。姿は神の御使いのようで、非常に恐ろしく、どこからおいでになったのかと尋ねることもできず、その方も名前を明かされませんでした。<sup>7</sup>ただその方は、わたしが身ごもって男の子を産むことになっており、その子は胎内にいるときから死ぬ日までナヅル人として神にささげられているので、わたしにぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないようにとおっしゃいました。<sup>8</sup>そこでマノアは、主に向かってこう祈った。「わたしの主よ。お願いいたします。お遣わしになった神の人をもう一度わたしたちのところに来させ、生まれて来る子をどうすればよいのか教えてください。」<sup>9</sup>神はマノアの声を聞き入れになり、神の御使いが、再びその妻のところにも現れた。彼女は畑に座っていて、夫マノアと一緒にいなかった。<sup>10</sup>妻は急いで夫に知らせようとして走り、「この間わたしのところにおいでになった方が、またお見えになっています」と言った。<sup>11</sup>マノアは立ち上がって妻について行き、その人のところに来て言った。「この女に話しかけたのはあなたですか。」その人は、「そうです」と答えた。<sup>12</sup>マノアが、「あなたのお言葉のとおりになるのであれば、その子のためになすべき決まりとは何でしょうか」と尋ねると、<sup>13</sup>主の御使いはマノアに答えた。「わたしがこの女に言ったことをすべて守りなさい。<sup>14</sup>彼女はぶどう酒を作るぶどうの木からできるものは一切食べてはならず、ぶどう酒や強い飲み物も飲むてはならない。また汚れた物を一切食べてはならない。わたしが彼女に戒めたことは、すべて守らなければならない。」

**【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙4章4～9節**

<sup>4</sup>主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。<sup>5</sup>あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。<sup>6</sup>どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。<sup>7</sup>そうすれ

ば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

<sup>8</sup>終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。<sup>9</sup>わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

**【福音書日課】マタイによる福音書11章2～19節**

<sup>2</sup>ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、<sup>3</sup>尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」<sup>4</sup>イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。<sup>5</sup>目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。<sup>6</sup>わたしにつまずかない人は幸いである。」<sup>7</sup>ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。<sup>8</sup>では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。<sup>9</sup>では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。

<sup>10</sup>『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう。』

と書いてあるのは、この人のことだ。<sup>11</sup>はつきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。<sup>12</sup>彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。<sup>13</sup>すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。<sup>14</sup>あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。<sup>15</sup>耳のある者は聞きなさい。<sup>16</sup>今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。

<sup>17</sup>『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

葬式の歌をうたったのに、

悲しんでくれなかった。』

<sup>18</sup>ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、<sup>19</sup>人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

## 士師記13章2～14節

<sup>2</sup>ダンの氏族に属するツォルアの出身で、マノアという名の一人の男がいた。その妻は不妊の女で、子を産んだことがなかったが、<sup>3</sup>主の使いが女に現れて言った。「あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。<sup>4</sup>今後はぶどう酒や麦の酒を飲まず、汚れたものを一切食べないよう気をつけなさい。<sup>5</sup>あなたは身ごもって男の子を産むからである。その子の頭にかみそりを当ててはならない。その子は胎内にいるときからナジル人として神に献げられているからである。この子は、イスラエルをヘリシテ人の手から救い始めるだろう。」

<sup>6</sup>妻は夫のもとに来て言った。「神の人が私のもとにやってきました。その姿は神の使いのようで、非常に恐ろしく、私はその方にどこから来たのかと尋ねることもできず、その方も私に名を明かしませんでした。<sup>7</sup>その方は言いました。『あなたは身ごもって男の子を産むであろう。今後は、ぶどう酒や麦の酒を飲まず、汚れたものを一切食べないよう気を付けなさい。その子は胎内にいるときから死ぬときまで、ナジル人として神に献げられているからである。』」<sup>8</sup>マノアは主に祈って、「わが主よ。どうぞ、あなたが遣わされた神の人をもう一度私たちのところに来させ、生まれてくる子に何をすべきか教えてください」と言った。

<sup>9</sup>神はマノアの声を聞かれた。神の使いが再び妻のもとにやってきました。彼女は野に座っていて、夫マノアがその場にいなかったのので、<sup>10</sup>妻は急いで走って行き、「この間私のところにお出でになった方が、また見えています」と夫に伝えた。<sup>11</sup>マノアは立ち上がって妻の後に付いて行き、その人のもとに来て、「妻と話したという方はあなたですか」と尋ねた。その人が「そうだ」と答えると、<sup>12</sup>マノアは言った。「あなたのお言葉どおりになりましたら、その子が守るべきことや、なすべきことは何でしょうか。」<sup>13</sup>主の使いはマノアに言った。「私がこの女に言ったすべてのことを、彼女は守らなければならない。<sup>14</sup>彼女はぶどう酒を作るぶどうの木からできるものは一切食べてはならず、ぶどう酒や麦の酒を飲んではいけません。汚れたものも一切食べてはならない。私が彼女に命じたすべてのことを、彼女は守らなければならない。」

## フィリピの信徒への手紙4章4～9節

<sup>4</sup>主にあっていつも喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。<sup>5</sup>あなたがたの寛容な心をすべての人に知らせなさい。主は近いのです〔別訳→近くにおられます〕。<sup>6</sup>何事も、思い煩ってはなりません。どんな場合にも、感謝を込めて祈りと願いを献げ、求めているものを神に打ち明けなさい。<sup>7</sup>そうすれば、あらゆる人知を超えた神の平和が、

あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスにあって守るでしょう。

<sup>8</sup>なお、きょうだいたち、すべて真実なこと、すべて尊いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判のよいことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。<sup>9</sup>私から学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

## マタイによる福音書11章2～19節

<sup>2</sup>さて、ヨハネは牢の中でキリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、<sup>3</sup>尋ねさせた。「来るべき方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか。」<sup>4</sup>イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。<sup>5</sup>目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、規定の病を患っている人は清められ、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。<sup>6</sup>私につまずかない人は幸いである。」

<sup>7</sup>ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒野野へ出て行ったのか。風にそよぐ葦か。<sup>8</sup>では、何を見に行ったのか。柔らかい衣をまとった人か。柔らかい衣を着た人なら王宮にいる。<sup>9</sup>では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。

<sup>10</sup>『見よ、私はあなたより先に使者を遣わす。

彼はあなたの前に道を整える』

と書いてあるのは、この人のことだ。

<sup>11</sup>よく言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。<sup>12</sup>洗礼者ヨハネの時から今に至るまで、天の国は激しく攻められており、激しく攻める者がこれを奪い取っている。<sup>13</sup>すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。<sup>14</sup>あなたがたが進んで受け入れるなら、この人こそ。来たべきエリヤなのである。<sup>15</sup>耳のある者は聞きなさい。

<sup>16</sup>今の時代は何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者たちにこう言っている子どもたちに似ている。

<sup>17</sup>『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

吊いの歌を歌ったのに、

悲しんでくれなかった。』

<sup>18</sup>ヨハネが来て、食べも飲みもしないと、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、<sup>19</sup>人の子が来て、食べたり飲んだりすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きが証明する。」

## 黙想のためのノート

### 次主日聖書日課について

・12月13日「待降節第3主日」の日課主題は「先駆者」。待降節の聖書日課は、「新約」の先駆けとして「旧約預言(預言者)」を取り上げると共に、主イエスの直接の先駆者として「洗礼者ヨハネ」を取り上げる。

・キリスト教会は、いまだユダヤ教内で活動していた時代から、主イエスの先駆者として「洗礼者ヨハネ」を位置づけてきた。当時のユダヤ人社会において、洗礼者ヨハネは、主イエスよりもはるかに良く知られた宗教家で、大衆的人気があると共に、ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパスからも一目置かれていた。主イエスの宗教活動は、おそらくこの洗礼者ヨハネのもとで始められ、その最初に「洗礼」を受ける出来事があったのであるが、まもなくヨハネが捕らえられ処刑されることになったのを契機に、独自の宣教活動に移行するようになったと考えられる。四福音書はいずれも、主イエスの宣教活動を描く前に洗礼者ヨハネの活動を端的に伝え、「洗礼」を通してヨハネの働きを主イエスが継承したものと位置づけている。また、ルカ福音書は、主イエスの誕生物語と並行して洗礼者ヨハネの誕生物語を伝え、主イエスの母マリアとヨハネの母エリサベトの交流をも描くことで、両者の関係が宗教的師弟関係にとどまらず誕生以前から計画されていたことであるという理解を示している。初代教会における「洗礼者ヨハネ」に関する共通理解はイザヤ書40章の預言を典拠としているが、福音書は主イエスや人々の証言としてヨハネが「預言者エリヤの再来」として理解されていることも伝えている。また、ヨハネ福音書は、共観福音書とは視点の異なる理解を含んでいる。

・「洗礼者ヨハネ」は、主イエスの先駆者として位置づけられるが、洗礼者ヨハネに先立つ先駆者として旧約の預言者らが位置づけられてきた側面もある。洗礼者ヨハネを「最後の預言者」とする理解も福音書に見られる。一方、洗礼者ヨハネを「預言者」と結びつけて理解することによって、旧約の預言者のイメージが歪められてきた側面もある。洗礼者ヨハネは、「獣の皮衣を身にまとい、野蜜とイナゴを食す」者としてのイメージで伝えられているが、これは元来、旧約律法で「ナジル人」として規定される人のイメージである。

・「待降節第3主日」は、伝統的に「喜びの主日」、「薔薇の日曜日」などと呼ばれてきた。かつてのラテン語典礼でこの主日の入祭文が「喜べ(ガウデテ)」で始められていたことから用いられるようになった呼称で、そのことを表す習慣として、この主日だけは「待降節」の典礼色「紫色」を用いずに「薔薇色」を用いることが特定の地域で古くから実践されてきた。近年、この「薔薇色」を用いる習慣が広まり、「アドヴェント・キャンドル」を典礼的に用いる教会では、第三のロウソクを「紫」ではなく「薔薇色」に置き換えるのが一般的となっている。

### 旧約日課(士師13章より)

・「士師記」は、ユダヤ教正典中「前の預言者」の第二巻、「ヨシュア記」に続く「イスラエル史」の中に位置づけられる文書である。ただし、「士師記」中に「預言者」は二度(4:4「女預言者デボラ」と6:7「一人の預言者」)しか登場しない(「ヨシュア記」にも「預言者」は登場しないが、ヨシュアがモーセの後継者として「預言者」の立ち位置で理解されている)。「士師記」には、「士師」と呼ばれる指導者が描かれるが、その立場はそれぞれに異なり、大抵はイスラエル諸部族が外敵に対抗するために必要に応じて連携して軍事行動を起こす際に指導者として立てられていくため、指導者としての影響力を行使できた部族範囲が士師によって異なる。実際には、イスラエル諸部族を横断する「士師」の制度があったわけではなく、部族横断的な働きをした者が後代に「士師」として位置づけられたのだろう。同様の働きをした者として、「サムエル記」の描く預言者サムエルも含むことができるが、正典がサムエルを「士師」と位置づけることはない。また、「士師記」中には12組(士師として描かれる女預言者デボラは、バラクという人物とセットで描かれる)の「士師」の物語が置かれているが、内容に欠ける人物もあり、「士師記」編集者が象徴的な意味を込めて12組にまとめたのであろう。「士師」の時代は、ヨシュアによるカナン定住の時代からサウル王の前までの時代で設定されており、紀元前12世紀から10世紀中盤までの150年程度が想定される。

・日課箇所は、「士師記」中最後に描かれる「士師サムソン」の誕生物語で、4章にわたって描かれる最も大部の士師伝承物語の冒頭、「サムソン誕生譚」である。大部の士師伝承物語は他に、「ギデオン物語」(6~9章)、「エフタ物語」(11~12章)があるが、「サムソン物語」は群を抜いて物語性豊かに描かれており、正典に採用される前にすでに伝承物語として完成していたものと考えられる。

・「士師サムソン」は、他の「士師」の場合のようにその人格を認められて諸部族から支持され役割を果たした者としては描かれず、単独行動で危機に立ち向かう一種の「英雄」として伝えられる。その人物の誕生譚の中で、彼が御使いの告知により両親のナジル人としての誓約のもとに誕生した「生まれながらのナジル人」として描かれる。「ナジル人」は、「民数記」6章で規定されている祭儀の聖潔を保つ者の一時的な呼称で、ぶどうから作られたものを一切口にしないこと、髪を切らないこと、死者に触れないことが制限内容である。それによって何か霊的な能力を発揮するというわけではないが、サムソンの場合は、髪を切らないことでその身体能力(怪力)が維持されていたとされる。

・サムソンの誕生譚は、旧約に典型的な不妊の女からの誕生として描かれ、洗礼者ヨハネの誕生物語にも一定の影響を与えたものと考えられる。

**使徒書日課(フィリピ 4 章より)**

・「フィリピの信徒への手紙」は、使徒パウロの書簡の一つで、「獄中書簡」に分類される。フィリピの教会は、パウロがバルナバと袂を分かって宣教活動を始めた最初に訪れた伝道地で、フィリピにはユダヤ人が少なく会堂が形成されていなかったが、裕福な紫布を扱う女商人リディアらが信者となり、その後のパウロの宣教活動に資金を提供する重要な協力教会となっていたと考えられる(パウロは、バルナバと袂を分かったことで、派遣元教会であるアンティオキア教会からの資金提供を期待できなくなっていたという事情がある)。  
 ・日課箇所は、伝統的な聖書日課で「待降節第 3 主日」に充てられてきた。パウロが獄中から困難な中でも「喜ぶこと」を呼びかけてきた手紙の終わりで、再度同様のことを呼びかけている。

**福音書日課(マタイ 11 章より)**

・日課箇所は、獄中のヨハネが弟子たちを主イエスのもとに遣わして尋ねた問いをきっかけに、はじめはヨハネの弟子たちに答え、次いで群衆に向けてヨハネのことを主イエスが語る場面。ルカ福音書(7 章)が同じ伝承記事を伝えているが、マタイ福音書のほうが簡潔である。両福音書では、一箇所(マタイ 11:12~15、ルカ 7:29~30)、明確に異なる伝承を組み込んでいる。  
 ・マタイがルカの伝えない独自の伝承を組み込んでいる部分(12~15 節)には、マタイだけが明示する「洗礼者ヨハネ=再来のエリヤ」という理解が示されている。「エリヤ」は、「列王記」の伝える預言者であるが、最後期の預言者らによって「主の日が来る前に遣わされる」(マラキ 3:23)と再来預言がなされた。「洗礼者ヨハネ」を「再来のエリヤ」とする理解は、初代教会で広く共有されていたと考えられるが、明示例は限られる

**来週の誕生日 (12 月 13 日~19 日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-236 番「見張りの人よ」(= I 218 番「夜を守る友よ」)は、19 世紀イギリスの外交官パウリングの作詞。曲は、アメリカの教会音楽家メーソンがこの詞のために作曲。讃美歌 21 では、I 218「世を守る友よ」から全面的に改訳されている。
- ・21-182 番「ほめうた歌え」は、20 世紀英国教会司祭 M・ペリーが「ザカリアの賛歌(ベネディクトゥス)」を敷衍した詞。曲は、20 世紀米国長老派の教会音楽作曲家ハル・ホプソンがこの詞のために作曲。
- ・21-243 番「闇は深まり」は、20 世紀前半ドイツで活躍した作家・宗教詩人ヨッヘン・クレッパーが、ユダヤ人女性と結婚してナチスから迫害を受けていた時期に発表した詩による讃美歌。彼は、家族が強制連行される前夜に家族と共に自害している。曲は、20 世紀を通じてドイツで教会音楽家・音楽教師として活動したベツォルトの作曲。
- ・21-229 番「いま来たりませ」(= II 96)は、前々週資料 201125 を参照。

**21-236「見張りの人よ」****Watchman, tell us of the night**

1. Watchman, tell us of the night, / what its signs of promise are. / Traveler, o'er yon mountain's height, / see that glory-beaming star. / Watchman, does its beauteous ray aught of joy or hope foretell? / Traveler, yes; it brings the day, / promised day of Israel.
2. Watchman, tell us of the night; / higher yet that star ascends. / Traveler, blessedness and light, / peace and truth its course portends. / Watchman, will its beams alone / gild the spot that gave them birth? / Traveler, ages are its own; / see, it bursts o'er all the earth.
3. Watchman, tell us of the night, / for the morning seems to dawn. / Traveler, darkness takes its flight, / doubt and terror are withdrawn. / Watchman, let thy wanderings cease; / hie thee to thy quiet home. / Traveler, lo! the Prince of Peace, / lo! the Son of God is come!

**21-182「ほめうた歌え」****Blessed be the God of Israel**

1. Blest be the God of Israel, / who comes to set us free; / who visits and redeems us, / who grants us liberty. / The prophets spoke of mercy, / of freedom and release; / God shall fulfill that promise / and bring the people peace.
2. God from the house of David / a child of grace has given; / a Savior comes among us / to raise us up to heaven. / Before him goes the herald, / forerunner in the way, / the prophet of salvation, / the harbinger of day.
3. On those who sit in darkness / the sun begins to rise, / the dawning of forgiveness / upon the sinner's eyes. / God guides the feet of pilgrims / along the paths of peace. / O bless our God and Savior / with songs that never cease!

**21-243「闇は深まり」****Die Nacht ist vorgedrungen**

1. Die Nacht ist vorgedrungen, / der Tag ist nicht mehr fern! / So sei nun Lob gesungen / dem hellen Morgenstern! / Auch wer zur Nacht geweinet, / der stimme froh mit ein. / Der Morgenstern bescheinet / auch deine Angst und Pein.
2. Dem alle Engel dienen, / wird nun ein Kind und Knecht. / Gott selber ist erschienen / zur Sühne für sein Recht. / Wer schuldig ist auf Erden, / verhüll nicht mehr sein Haupt. / Er soll errettet werden, / wenn er dem Kinde glaubt.
3. Die Nacht ist schon im Schwinden, / macht euch zum Stalle auf! / Ihr sollt das Heil dort finden, / das aller Zeiten Lauf / von Anfang an verkündet, / seit eure Schuld geschah. / Nun hat sich euch verbündet, / den Gott selbst ausersah.
4. Noch manche Nacht wird fallen / auf Menschenleid und -schuld. / Doch wandert nun mit allen / der Stern der Gotteshuld. / Beglänzt von seinem Lichte, / hält euch kein Dunkel mehr, / von Gottes Angesichte / kam euch die Rettung her.
5. Gott will im Dunkel wohnen / und hat es doch erhellt. / Als wollte er belohnen, / so richtet er die Welt. / Der sich den Erdkreis baute, / der lässt den Sünder nicht. / Wer hier dem Sohn vertraute, / kommt dort aus dem Gericht.